

「ルーマニア語における目的語の 代名詞による二重化について」

春 木 仁 孝

(本稿は日本ロマンス語学会 第19回大会(1983年5月21日、於大阪大学言語文化部)において口頭発表したものに基づいている。当日は、20分の時間制限を守るため割愛を余儀無くされた事も多い。以下では出来るだけ当日の発表の形に従いつつ、幾つかの点を本文中及び註において補足しておく。またルーマニア語の例には英語による註釈と訳を添えたが、これらは飽くまでも理解しやすさを主眼としているので、訳としてはぎこちない場合もあろうかと思う。)

0. はじめに

代名詞によって目的語を二重化するという現象はかなり多くの言語に観察されるものであり、この事実が既に、この現象と自然言語の持つ一般化し得る特質との関連を示唆している。ロマンス語についても、イタリア語やスペイン語においては目的語の二重化、或いは代名詞の二重使用が顕著に見られるが、おそらくルーマニア語の場合が最も複雑であるように思われる。実際にルーマニア人のインフォーマントで調査をした場合、各文例の容認可能性についての直観的判断には違いが見られることが予想される。しかし、一般に統語現象というのは何らかの意味論的裏付を持っており、その意味において連続的なものであり、容認可能性に関してははっきりとした境界線を引くのが困難である場合がむしろ普通である。従って重要なのは、それぞれの現象の裏にある関与的な傾向を捉えることである。ルーマニア語における代名詞による目的語の二重化も、詳しく調べてゆくとそこに幾つかの傾向を見出すことが出来る。更にこれらの傾向を五つの二項的ハイアラキーにまとめることが可能である。そしてこのハイアラキーの意味を考えることにより、このルーマニア語に特徴的と思われる現象が、実は多くの言語に通じる一般化し得る現象の顕れであることを明らかにしようとするのが本稿の目的である。本論にはいる前に、ルーマニア語の人称代名詞を整理したものを表の形で以下に示しておく。¹⁾

ルーマニア語の人称代名詞

		単 数				複 数				
		1 人称	2 人称	3 人称		1 人称	2 人称	3 人称		
				男	女			男	女	
主 格		eu	tu	el	ea	noi	voi	ei	ele	
対 格	強 形	mine	tine	el	ea	noi	voi	ei	ele	
	弱 形	長 形	mă	te	îl	o	ne	vă	îl	le
	縮約形	m-	te-	-l, l-	-o	ne-	v-	-i, i-	le-	
与 格	強 形	mie	ție	lui	ei	nouă	vouă	lor		
	弱 形	第 1 形	îmi	îți	îi		ne	vă	le	
		第 2 形	mi	ți	i		ni	vi	li	
	縮約形	-mi	-ți	-i		ne-	vi-	li-		
格		mi-	ț-	i-		ni	v-	le-		

1. 目的語の二重化の状況

1.1 先ず目的語の二重化が義務的な場合から見ていこう。それは、代名詞の強形が目的語として用いられている場合である。

- (1) a) *L-am văzut pe el ieri.*
 him I-have seen HIM yesterday²⁾
 (私は昨日彼に会った)
- b) *L-am văzut ieri.*
- c) **Am văzut pe el ieri.*

(1 a) のように *pe el* という強形の代名詞が用いられていると、必ず弱形代名詞(ここでは *l-*)で二重化しなければならない。強形だけを用いた(1 c)は非文である。ただし(1 b)のように弱形だけを用いることは可能である。同様のことを間接目的語についてみたのが(2)の例である。

- (2) a) *Lor li place să citească.*
 To-THEM to-them please that they read.
 (彼らは本を読むのが好きだ)
- b) *Îți dau cartea.*
 to-you I-give book-the
 (私は君にその本をあげる)
- c) **Lor place să citească*

(2a)の与格代名詞の強形は、弱形の *li* によって二重化されており、弱形がないと(2c)のように非文になる。(2b)は弱形だけの例である。³⁾

かなり義務的に目的語の二重化が起こるもう一つの場合は、目的語の名詞が定でありかつ人間をさしている時である。この場合、目的語の名詞は、必ず *pe* という目的語のマーカをとる。(3)、(4)のように個有名詞の目的語は、ほぼ義務的に弱形代名詞による二重化を受ける。

(3) *Pe Sandu îl văd.*

Sandu him I-see.

(私はサンドゥを見る)

(4) *Dă-i lui Sandu mănușile.*

give-him to Sandu gloves-the

(サンドゥにその手袋をあげなさい)

勿論、個有名詞でなくとも人間をさす名詞でありそれが定ならば、以下のようにほぼ義務的に弱形による二重化が行なわれる。(5)は対格の、(6)は与格の例であるが、(5b)のように目的語が不定の場合は二重化を行なうと(5c)のように非文となる。

(5) a) *Îl caut pe profesor.*

him I-look-for (the) professor

(私はその先生を捜している)

b) *Caut un profesor.*

I-look-for a professor

c) **Îl caut un profesor.*

(6) *I-am mulțumit vecinului.*

to-him-I-have thanked to-neighbor-the

(私はその隣人に感謝した)

以上のことから、弱形代名詞による目的語の二重化に関して、*human > non-human* というハイアラーキーをたてることが出来る。

1.2 ここで対立とせずハイアラーキーとしたのは、たとえば(7)のように人間を表わしていないくとも、定でありさらに前置された目的語は弱形代名詞により二重化することが出来るからである。

(7) a) *Tu umbrela mea ai luat-o?*

you umbrella-the my you-have taken-it ?

(君は私のかさを持ちましたか?)

b) *Pardesiul meu unde l-ai pus ?*

coat-the my where it-you-have put ?

(私のコートを君はどこに置いたのですか?)

(7a)、(7b)ともに「私の」という所有形容詞(この場合、名詞には定冠詞が付く)が付いた例である。この例からも定>不定というハイアラーキーをたてることが出来る。次に(8)を(7)と比較してみよう。

- (8) N-am citit cartea lui.
not-I-have read book-the his
(私は彼の本を読まなかった)

(8)の目的語もやはり「彼の」という所有形容詞が付いている点では(7)と同じだが、目的語が後置されている点が違っている。このように同一条件で、前置されている場合と後置されている場合を比べると、前置されている場合の方が二重化の起こる可能性が高いことが観察される。従ってここで、前置>後置というハイアラーキーをたてることができる。⁴⁾

1.3 さて、(3)~(6)の例で human > non-human というハイアラーキーがたつことを見たが、これは不定代名詞の場合にも当てはまる。

- (9) a) Nu i-a dat flori nimănuî.
Not to-him-he-has given flowers to-nobody.
(彼は花を誰にもやらなかった)
- ?b) Nu l-am văzut pe nimeni.
Not him-I-have seen nobody.
(私は誰も見なかった)

(9 a) の nimănuî は nimeni 「誰も」の与格形であり、弱形代名詞 i によって二重化されている。⁵⁾ ただし(9 b)のように対格形の場合、pe が付くことは問題ないが、これを二重化すべきなのか、あるいはした方が良いのかという点については未確認であり、また二重化した実例もまだ採取していない。(註(6)を参照)。いずれにしろ、nimeni に対応して「何も」という意味を表わす nimic の場合は、(10)に見られるように pe を付けることも二重化することも出来ない。

- (10) a) N-am nimic în buzunar.
Not-I-have nothing in pocket.
(私はポケットの中には何も持っていない)

b) *Nu l-am pe nimic în buzunar.
同様のことが、cineva 「誰か」と ceva 「何か」についても見られる。

- (11) a) I s-a furat cuiva ceva.
to-him Refl. Pro.-it-has stolen to-somebody something.
(誰かから何かが盗まれた)
- ?b) L-am văzut pe cineva.
him-I-have seen somebody.
(私は誰かを見た)

(11 a) では cineva の与格形 cuiva がやはり i という弱形代名詞で二重化されているが、同一文中にある ceva には pe も付いていないし二重化も起こっていない。ただし nimeni と同様、cineva が直接目的語の場合の二重化についてはやはり未確認である。⁶⁾ この human > non-human というハイアラーキーは、次の例の altul のように文脈によって人を指す場合と物を指す場合とがある代名詞においても観察される。

- (12) a) *L-am văzut pe altul.*
 him-I-have seen another man
 (私は別の人を見た)
- b) *Am văzut altul.*
 I-have seen another thing.
 (私は別の物を見た)

人を指している場合には、(12a)のように *pe* を伴ない二重化が行なわれるが、物を指している場合にはどちらも起こらない。

1.4 *nimeni* と *cineva* の二重化については与格の例は確認出来たが、対格の場合の例は確認出来なかったと述べたが、他の場合も考えあわせてみると、間接目的語>直接目的語というハイアラキーをたてることが出来そうである。例えば、疑問代名詞の場合も、直接目的語 *cine* の二重化は義務的ではないが、間接目的語 *cui* の場合はほぼ義務的であり、文法書によっては *cine* の与格形は *cui + îi(i)* としているものもあるぐらいである。⁷⁾

- (13) a) *Pe cine cunoaște acolo?*
 whom he-knows there?
 (彼はあそこでは誰を知っていますか)
- b) *Cui i-ai dat acest cal?*
 to whom to-he-you-have given this horse?
 (君は誰にこの馬をやったのですか)

また、同一文中に直接及び間接の二つの目的語がある場合、一般に間接目的語のみが二重化される。

- (14) *Mi-a dat mie cartea.*
 to-me-he-has given TO ME book-the.
 (彼は私にその本をくれた)

ただしこの場合、二つの目的語が動詞に対して、また互いに相対的にどのような位置関係にあるかということを考慮に入れなければならない。(14)のように二つの目的語が共に動詞に後置されている場合は、一般に間接目的語-直接目的語の語順を取り、間接目的語のみが二重化される。間接目的語のみが動詞に前置された(15a)の場合も(14)と同じく、間接目的語のみが二重化を受ける。

- (15) a) *Vecinului i-am dat creionul.*
 to-neighbor-the to-him-I-have given pencil-the
 (その隣人に私はその鉛筆をあげた)
- b) **Vecinului_j i_j-am dat-o_i cartea_i.*
 to-neighbor-the to-him-I-have given-it book-the
 (その隣人に私はその本をあげた)

この場合、(15b)に見られるように直接目的語の二重化は行なうことは出来ない。しかし、(10)のように直接目的語のみが動詞に前置されている時は、(14)や(15)の場合と異なって、間接目的語と共に直接目的語も二重化することが出来る。

- (16) *Cartea_i i_j-am dat-o_i vecinului_j.*
 book-the to-him-I-have given-it(f.) to-neighbor-the
 (私はその本をその隣人にあげた)

さらに、この場合もしどちらか一方だけを二重化するとすると、二重化されるのは動詞に前置されている直接目的語の方であり、この例に関していうならば、間接目的語>直接目的語のハイアラキーよりも、前置>後置というハイアラキーの方が強いということが観察される。アカデミーの文法書によれば、前置された間接目的語の二重化が不可能な場合は存在しないとのことである。後置されている場合については、事物を指す名詞の時だけが二重化されないとのことだが (p.146)、Frakas (1978) は、事物を指す名詞の時も二重化は不可能ではないと述べて例を上げており、さらに検討が必要である。

1.5 human で定である例についても、目的語の前置、後置による二重化の度合の違いが見られる。(3)~(6)で見たように、この場合には一般に目的語の二重化が見られるのだが、(17a)、(18a)のように前置された目的語についてはそれがほぼ義務的であるのに対し、(17b)、(18b)のように後置されている場合には必ずしも二重化しなくてもかまわない。

- (17) a) *Pe profesor îl caut.*
 professor him I-look-for
 (私はその先生を捜している)
 b) *(Îl) caut pe profesor.*
- (18) a) *Lui Sandu i-am dat cartea.*
 to Sandu to-him-I-have given book-the
 (サンドゥに私はその本をやった)
 b) *(I-)am dat lui Sandu cartea.*

この前置>後置というハイアラキーは、human > non-human というハイアラキーに対しても優位に立つようである。(7)で見たように、人間を指していなくとも定である目的語が前置されていると一般に二重化が起こる。次例のように指示詞に関しても前置されていれば二重化はほぼ義務的であるが、後置されている時はそうではない。勿論この場合、指示詞が人間を指していれば、前置された目的語が二重化される確率が極めて高くなるのは言うまでもない。

- (19) a) *Asta am știut-o.*
 this I-have known-it (f.)
 (私はこのことを知った)
 b) *Am știut asta.*
- (20) a) *Pe acela îl cunosc.*
 this (man) him I-know
 (この人を私は知っている)
 b) *(Îl) cunosc pe acest vecin.*
 (him) I-know this neighbor
 (私はこの隣人を知っている)

また、不定冠詞の付いた直接目的語が *pe* を伴い、さらに前置されているとほぼ義務的に二重化される。

- (21) *Pe un argat l-a mîrat la cîmp.*
a farm worker him-he-has took-with to (the) field
(彼は一人の作男を畑へ連れていった)

後置されている場合は、*pe* が付いていても二重化は義務的ではない。不定冠詞の付いた名詞が *pe* を取る場合に関しては [+specific] という素性を導入して考える必要があると考えられるが、今回は詳述する余裕がないので、次の機会にゆずりたい。

1.6 以上の4つのハイアラキーに加えて、代名詞>名詞というハイアラキーが観察される。(22)の例に見られるように、所有形容詞+名詞という表現と所有代名詞だけの時とを比べてみると、完全に代名詞化されると *pe* が現われ、さらに二重化されるのが一般的である。⁸⁾

- (22) *N-am citit cartea lui, am citit-o; pe a mea.*
not I-have read book-the his, I-have read-it mine
(私は彼の本を読まないで、自分のを読んだ)

次の例においても、(23a)のように *manualul* という名詞がある場合は二重化しなくてもよいが、(23b)のように代名詞表現になると一般に二重化が行なわれる。

- (23) a) *Folosesc manualul cel bun.*
I-use manual-the that good
(私はその良い参考書を使う)
- b) *Îl folosesc pe cel bun.*
it I-use that good (one)
(その良いのを私は使う)

同じことは、形容詞用法と代名詞用法をあわせ持つ要素の総てについて観察することが出来る。もう一つだけ例をあげておこう。

- (24) a) *Citește cealaltă carte.*
read another book
(他の本を読みなさい)
- b) *Citește-o pe cealaltă.*
read-it(f.) another-one
(他のを読みなさい)

2. ハイアラキーとその意味

2.1 これまでに見てきたことから、ルーマニア語における目的語の弱形代名詞による二重化の現象には、以下の五つのハイアラキーが存在することが確認された。

- (25) a) human > non-human
b) 定 > 不定

- c) 間接目的語>直接目的語
- d) 前置>後置
- e) 代名詞>名詞

さらにこの五つのハイアラーキー間に、概ね次のような優位関係があることも分かった。

(26) 前置>間接目的語>{ 定 }> human
代名詞

勿論、ハイアラーキーをたてただけでは何も説明したことにはならない訳で、記述的段階から一步進んでこれらのハイアラーキーの意味するところのものを考えなければならないのだが、(25)のハイアラーキーが、所謂トピックとかテーマという言葉で呼ばれる要素について観察されるそれとまさに同じものであることは、既に明白であろう。勿論、ここでトピックとはテーマとは何かを厳密に定義しなければいけないのだが、その余裕はないので、一般に流布している定義、「それについて何か述べられるところのもの」という解釈でもここでの議論の大筋には影響ないので、そのようなものとして考えてもらってかまわない。⁹⁾つまりルーマニア語に特徴的と思われたこの現象も、例えばフランス語の次の例に見られるような、テーマである要素を文頭に置きこれを弱形代名詞で受ける現象と同じものがその起源にあると考えられる。¹⁰⁾

(27) *Moi, il me connaît.*

ところが、このような構文が頻繁に用いられていると、その伝達の機能に基く動機づけが弱まり、この目的語が再分析を受けることになる。一般にテーマとなる要素は定であり、人間であることが多く、また間接目的語であることが多いし、また定であることから代名詞であることも多い。そしてこれらの要素は文頭に、つまり動詞に前置されることが多いところから、これらの意味的・統語的素性を持った要素を二重化するのだというような再分析がなされ、テーマであるかどうかということとは関係なくこのような素性を持つ要素は二重化されるようになってくる。また、多くの言語で(28)のように、*afterthought*を表わす要素とか確認を表わす要素、フランス語でいうなら *complément explicatif* とでも呼べる要素が文末におかれるという構文が見られる。

(28) *Il me connaît, moi.*

この場合、代名詞を持つ言語ではやはり二重化を行なうことが多く、上記に述べた再分析を受ける過程でこの種の構文が補助的役割を果たしたのではないかと考えられる。つまりこの後置された要素もテーマとほぼ同じ意味的・統語的素性を持っており、前置された要素以外の要素にも二重化が広がっていくのを容易にしたことが考えられる。¹¹⁾この再分析の結果がさらに一般化されると、弱形代名詞が動詞に膠着、融合し、最終的には目的語と動詞との一致の形態素になってしまう。¹²⁾実際、モルダヴィ等一部の地域では弱形代名詞をもう一度、動詞の後で繰り返す現象 (*L-am văzutu-l*) が観察されると報告されているが、これは弱形代名詞が代名詞から一致の形態素へと移行しつつあることを示唆していると解釈できる。標準ルーマニア語の場合はまだそこ迄は進んでおらず、所謂テーマの持つ特性が二重化の条件としていまだかなり強く働いている。

2.2 以上に述べてきたことは、ルーマニア語に見られるこの現象の一般化し得る大きな傾向について述べたものであり、実際にはルーマニア語特有の統語構造と複雑に絡み合っていて、さらに検討を要

する細かい問題が残っている。たとえば直接目的語のマーカ―の *pe* の使用と二重化の関係の問題がある。Farkas (1978) は、後置された直接目的語は *pe* が付いていなければ二重化することは出来ないと述べている (p. 93)。ここで見てきた例については、この観察が正しいことが確認される。しかし、これは *pe* の存在が二重化の要因となるということではなく、*pe* の使用を促す条件の集合の中に、二重化の条件が含まれているということである。しかし前置された目的語については(7)のごとく *pe* がなくとも二重化を行なうことが出来る。後置された目的語についても、次の例では *pe* の使用と二重化が密接に対応している。

- (29) a) *Mi-a spus totul/tot/toate.*
 to-me-he-has said all
 (彼は私にすべてを話した)
- b) *Mi le-a spus pe toate.*

totul は *tot* に後置冠詞が付いた形であり、*toate* は中性的な意味で使われる女性複数形である。3者とは同じ意味であると考えられるが、*toate* は *pe* をとることが出来、その時は二重化が行なわれる。(29 a) と (29 b) の違いは、単に *pe* があるかどうかという表面的な違いのように見えるが、他の例から考えて(29 b) の *toate* は [+specific] という素性を持っているのではないだろうか。次例のような場合には *pe toate* の使用が適当で、*pe* のつかない形と自由に入れ替えられないのではないかと考えられる。

- (30) *Unde e prăjitura? – Am mâncat-o pe toate.*
 where is cake-the – I-have eaten-it all.
 (お菓子はどこですか? – 私が全部食べてしまいました)

従って(29 b) の場合も、*pe* があるから二重化が可能なのではなく、意味論的裏付けがあって *pe* が用いられ、その意味論的裏付けにより目的語の二重化も可能になるのではあると考えられる。

2.3 ルーマニア語に特徴的と思われる現象から出発して、結局はそれが多くの言語に見られるテーマ的要素をめぐる一般的な現象の一つの顕れに過ぎないこと見た訳だが、各言語の特殊性、つまり言語の多様性を研究する上で重要なことは、各言語の特殊性の中に埋没してしまうのではなく、当該言語の独自性を通してその裏にある一般化し得る人間言語の特性を明らかにすることである。これは何も各言語の特殊性を軽視するものではなく、むしろ逆に一般化し得る特性の当該言語における顕れ方を研究する過程で、たとえばルーマニア語の *pe* の使用条件のように、その言語の真の独自性もまた明らかになると考えられる。今後はむしろ、ルーマニア語という個別言語の文法の問題として、付記や註に述べたこともあわせて、この現象をさらに追求してゆく必要がある。この小論が、そのような研究のきっかけとなれば幸いである。¹⁸⁾

(付 記)

大会当日の発表後、(17 b) (Îl) *caut pe profesor.* のような文について、代名詞が用いられている文、即ち目的語の二重化が起こっている時とそうでない時とは意味が違い、同列に論じられないのではないか、という質問があった。しかし、現代のルーマニア語ではこの例のような場合、代名詞を用いるの

が普通であり、代名詞のない文は早く話す時などに見られるくらいであると報告されている。この例で(İI)とカッコに入れたのは、後置されている目的語については代名詞がなくとも非文法的にはならないということを示すためである。つまり、ここでは代名詞による目的語の二重化は、本来の伝達機能によるその使用の動機は薄れて、かなり機械的な統語操作になっていると考えられる。(丁度フランス語の歴史の中で主語代名詞が辿った過程を思い起こして頂きたい。)

既に述べたように、後置された直接目的語が二重化されるためには、pe が存在していなければならない。従って、後置された直接目的語に関しては、pe の使用条件を解明することが重要な課題である。たとえば、次例のように目的語が総称的・一般的な意味で用いられている時は pe は使えないと Nandriş (1953) は述べているが、Farkas (1978) ではこのような場合は考慮されていない。

- (31) Iubesc copiii
I-love children-the
(私は子供が好きです)

また、一般にルーマニア語では前置詞の後では定冠詞は使用されないが、pe についても同様であり、目的語の名詞が修飾語句を従えている場合を除き、目的語のマーカー pe の後の名詞は無冠詞である。一方、後置冠詞のついた名詞が pe を取らずに目的語として立つ場合がある。

- (32) a) A prins pe hoț.
he-has captured (the) thief
(彼はその泥棒をつかまえた)
b) A prins hoțul
he-has captured thief-the

このような場合、両者にどのような違いがあるのか、今後に残された問題である。

(註)

(1) 縮約形のうち-X型は命令形のと (dă-i), 前置詞 a のと (a-ți da), 接続詞 să のと (să-l văd) などで用いられる。X-型は女性代名詞 o の前 (ți-o dă), 助動詞 avea の前 (mi-ai dat) などで用いられる。与格弱形第2形は、対格代名詞の前 (mi-l dă), fi の口語形 s (=sînt), i (=e, este) の前 (mi-i frig) などで用いられる。尚、女性3人称単数の対格弱形代名詞 o は、複合時制では常に過去分詞に後置される (am cumpărat-o)。

(2) 註釈中の大文字(例HIM)は、対応するルーマニア語代名詞が強形であることを示している。

(3) ただし同一文中に弱形代名詞の対格形と与格形が現われる場合、すべての組み合わせが可能な訳ではない。

- (a) Li_i i-am dat lor_i . (b) I-am dat lor .
to-them them-I-have given To-THEM.
(私は彼らにそれらを与えた)
(c) Li_i le-am dat lor_i . (d) Le-am dat lor .
to-them them(f)-I-have given To-THEM
(私は彼らにそれらを与えた)

(a) のように li_i (3人称複数与格弱形-男性3人称複数対格弱形) や (c) における li_i (3人称複数

与格弱形－女性 3 人称複数対格弱形) といった弱形代名詞の連続は、恐らく口調の関係から避けられ、このような場合に限り例外的に対応する弱形代名詞なしで強形 *lor* が用いられて、(b) や (d) のようになる。ルーマニア語における代名詞の組合わせに関する制約について論じたものとしては、Farkas-Kazazis (1980) があるので参照されたい。

(4) (1) と (8) の例を比較する時に忘れてはならないのは、目的語のマーカ－ *pe* との関係である。(7) のように目的語が前置されている時は *pe* が無くとも二重化は可能だが、(8) のように後置されている時は、後述するように *pe* の存在が二重化にとっての必要条件になっている。しかし(8)の目的語の前に *pe* を置くことは出来ない。従って二重化も出来ないことになる。いずれにしろ、前置された目的語の方が後置された目的語よりも、二重化についての制約が少ないという事実はかわりはない。

(5) ここで不定代名詞が二重化されていることは、定 > 不定のハイアラーキーからすれば例外ということになるが、[+ human] という素性の方がハイアラーキーの上で優位に立っていると考えれば説明できる。また、一般に不定代名詞の名の下に一括される要素が、意味論的に等質なものであるかどうかについては、大いに疑問のあるところである。

(6) 発表後に気付いたルーマニア・アカデミーの文法書の記述によると、直接目的語の *nimeni* と *cineva* は前置・後置に拘らず二重化されないようである (p.145)。この点については、不定代名詞の中でも *nimeni* と *cineva* だけは例外的存在といえる。Farkas (1978) の p.93 の分類によっても、この両者は二重化されないことになる。また、一般に人間を指す名詞で定のものに付くとされる *pe* が *nimeni* と *cineva* に付いている点も例外のように見えるが、註(5)で述べたように不定代名詞の意味論的考察との関連でさらに検討が必要である。尚、スペイン語でも *nimeni* にあたる *ninguno* に目的語のマーカ－の *a* が付いて、*Conozco a ninguno*。となる並行的現象が見られることを付記しておく。

(7) Murrell-Ştefănescu-Drăgăneşti (1970)

(8) 後置された目的語が [－ human] な名詞の時には *pe* を付けることは出来ないのに、代名詞だとそれが可能になる点に関して、Rosetti (1975) は、代名詞は抽象的な意味を表わし、対象を意味する *signifier* のではなく指示 *indiquer* しているだけで、その役割は純粋に機能的なものであるからだと言っているが、かなり苦しい説明と言わざるを得ない。

(9) 筆者のテーマについての考え方は Haruki (1983 a, b) に詳しく述べてあるので、これらの論文を参照されたい。

(10) フランス語でも、文頭に転位された強勢形代名詞は文外にあると考えられ、文中において必ず二重化されなければならない。しかし、名詞句の場合、間接目的語は必ずしも二重化しなくてもよく、この点でルーマニア語に見られるハイアラーキーと一致しない。しかしこれは、間接目的語が動詞との結び付きの度合いが直接目的語と比べてやや緩いので語順を動かすことが可能であり、従って文頭に置かれた場合も必ずしも文外にあるとは解釈されないためと思われる。勿論、この場合も一般に二重化されることが多い。ただし、間接目的語でも前置詞を伴わずに文頭に出された場合は、次例のように必ず二重化しなければいけない。

Olivia, je lui ai déjà téléphoné

(11) 同様の趣旨のことが、Givón (1976) にも述べられている。

(12) 実際に動詞が目的語と一致を行なう言語では、一致の形態素は弱形代名詞 clitics に由来しているのが一般的である。

(13) ロマンズ語学会での発表後に、Farkas (1978) の存在を知った。これは、小論ながらもルーマニア語の目的語の二重化が起こる条件を手際よく、規則の形にまとめたものである。そこで述べられている規則は、本論文の内容ともほぼ一致している。しかしながら、整理がやや機械的に過ぎ、説明されなければならない問題点がまだ多く残っている。いずれにしろ、この目的語の二重化という現象は以下に引用したアカデミーの文法書が述べているように現在もなお進行中のものであり、文法書等の記述と現在のルーマニア語の状況との間には既にずれもあると思われるので、現時点での資料、特に複数のインフォーマントによる調査が望まれるところである。

(Reluarea sau anticiparea complementului prin pronume este un fenomen care s-a dezvoltat treptat în ultimele secole și continuă să se dezvolte și astăzi (în limba veche repetarea era obligatorie în mult mai puține cazuri față de uzul actual). (p. 146))

BIBLIOGRAPHIE

- Bredemeier, J. (1976) *Struktur Beschränkungen im Rumänischen*. Tübingen: TBL Verlag Gunter Narr.
- Byck, J. (1937) "L'emploi affectif du pronom personnel en roumain". *Bulletin Linguistique V*. p. 15-32.
- Cazacu, B. et ali. (1978) *Cours de langue roumaine, 3^e édition revue et corrigée*. București: Editura Didactică și Pedagogică.
- Farkas, D. (1978) "Direct and Indirect Object Reduplication in Romanian." *CLS 14*, p. 88-97.
- Farkas, D. and K. Kazazis (1980) "Clitic Pronouns and Topicality in Rumanian." *CLS 16*, p.75-82.
- Givón, T. (1976) "Topic, Pronoun and Grammatical agreement", in C.N. Li (ed.) *Subject and Topic*. New York: Academic Press. p. 149-88.
- Gramatica limbii române I.* (1963), *II.* (1966) București: Editura academiei.
- Grauer, A. (1945) "Contributions à l'étude du genre personnel en roumain." *Bulletin Linguistique XIII*. p. 97-104.
- Haruki, Y. (1983a) "Structure communicative de l'énoncé – examen de thème", *Studies in Language and Culture IX*. p. 81-95.
- (1983b) "Impersonnel du français – fonction des éléments adverbiaux et énonciation", *Bulletin d'études de linguistique française 17*, p. 18-35.
- Lombard, A. (1974) *La langue roumaine: une présentation*. Paris: Klincksieck.
- Murrell, M. and Ștefănescu-Drăgănești (1970) *Romanian* (Teach Yourself Books). Hodder and Stoughton.

- Nandriș, G. (1953) *Colloquial Rumanian*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Rosetti, A. (1975) "Nouvelles remarques sur la catégorie du neutre en roumain: la situation du pronom." *Hommage à la mémoire de P. Gardette*. p. 457-58.
- Seidel, E. (1948) "Gibt es ein Genus personale?" *Bulletin Linguistique XVI*, p. 5-93.
- Seidel-Slotty, I. (1940) "„Hypertrophie“ der Pronomina im Rumänischen" *Bulletin Linguistique VIII*. p. 142-53.
- Steriade, D. (1980) "Clitic doubling in the Romanian WH Constructions and the Analysis of Topicalization" *CLS 16*, p. 282-97.
- 直野 敦 (1977) 『ルーマニア語の入門』 東京: 白水社